

初版の序

画像診断や手術手技の著しい進歩にも関わらず、周術期の神経合併症はまだまだ大きな問題である。手術手技によっては、運動機能、感覚機能、視覚機能、聴覚などさまざまな神経合併症が発生する。これらは、いずれも患者さんの機能的予後に重大な影響を及ぼす。近年は症状がない早期から手術をする場合も多く、これらの合併症を予防することはきわめて重要な責務となっている。こうした背景をもとに、周術期の神経合併症の予防のため、さまざまな神経モニタリングが施行されている。手術が終わってから異常が明らかになった場合、その改善が困難な場合も多く、術中から異常を察知し、術式や患者管理法を修正することで神経学的合併症の発生を防止しなくてはならない。

術中神経モニタリングにおいてはまだまださまざまな障壁がある。1つめは、疾患や術式によってさまざまな神経モニタリング法が適応されることである。2つめは、方法やアラームポイントを含め、いまだ神経モニタリング法のスタンダードが確立している状況ではないこと、3つめは、手術、麻酔、神経モニタリングにかかわるスタッフが協力してモニタリングを行えるチーム医療の確立が必要なことである。

一般に神経モニタリングには、外科医、麻酔科医、神経内科医、臨床検査技師、臨床工学士などの協力が必要で、良好なチーム医療の確立なしでは、良い神経モニタリングを実施することは困難である。術中神経モニタリングをチーム医療で行うためには、基礎的な知識や方法の統一が不可欠である。しかしながら、神経モニタリングはさまざまな方法があり、場合により術者によっても変更されるかもしれない。この「術中神経モニタリングバイブル」は1つのたたき台として、術中に共通の言語として使用することで、今後の神経モニタリ

ング法の確立の一助になればと考えている。施設ごとに異なる内容も含まれるが、今後はどこにいても均一な神経モニタリング法が提供できるような環境を学会などで整えていかなければならない。

今回、術中に使用される神経モニタリング実施に必要な、モニタリングの基礎的事項、解剖、疾患や術式、および各神経モニタリング法とその解釈についてのポケットマニュアルを作成した。術中神経モニタリングは、各施設での実施が必須となりつつある領域であり、さらに普及していくことが予想される。本書は、はじめて手術室にはいる臨床検査技師などの医療従事者でも容易に理解できる難易度での知識の整理を第一目標とし、術中神経モニタリングを施行する医師・臨床検査技師が手術室で簡便に使用できる1つの携帯本になればと考えている。議論のある内容も多く含まれているが、皆様のご意見をいただきさらに改訂することで、術中神経モニタリングの確立や周術期神経合併症の軽減に寄与できればと考えている。

2014年4月

奈良県立医科大学麻酔科学教室

川口昌彦